

〔承應遺事〕御酒をこのませ給ひ。○後時々御量を過させ給ふを、諸臣ひそかにおそれけれども、諫奉る人もなかりけり、或とき御宴の興も盛にて、天機うるはしきに、徳大寺公信御前に出て、度々御酒過させ給ふは、玉體の御ため、其おそれすくなからず、聖人の教、程朱の教にもそむかせ給ひなんと、諫奉られければ、天機忽かはらせ給ひ、御劔をとらせられ、逆鱗甚しかりしに、從容として又申上られけるは、古昔より聖君の御手づから臣をきらせ給ふをきかざれども、公信が諫をきこしめしいれさせ給はゞ、身命はおしむにたらすとて、立もさらすぞさぶらはれける、陪侍の人入しりぞかしめる、上も御劔をもたせ給ひながら、入御なりにけり。○中あくるあしたはやく出御ましまし、近習の人に、さてもよべの御ふるまひ、いたく悔させ給ひ、御寢もならせ給はず、此後公信が参らんもおぼつかなくおぼしめすと仰ありしに、公信は天機を伺ひ奉らんとて、とくより参内しさぶらふと申上られければ、よろこばせ給ひ、座を賜ひてめされにけり、公信はよべ天機に忤ひ奉られしをおそれつ、しみ、御前に出られける、龍顏殊にうるはしく、さてもよべの忠諫叡感淺からずおぼしめせり、此後は御酒をいましめて、た、せ給ふべし、よべの御ありさま、かへすがへす御恥かしくおぼしめすなり、今よりいよく忠諫をいれ、不徳をたゞし、嘉徳をたすくべしとて、よべとらせ給ふ御劔を、御手づから賜はりけり。

〔先哲叢談後編六〕南宮大歎、名岳、字喬卿、號大歎、又號煙波釣叟、通稱彌六、信濃人。

大歎善飲盡斗、至歲五十、刻留罷酒、安清河訪之、儲待以豐饌、大歎與之獻酬、未嘗飲酒滴、清河酣暢之餘、與坐客語曰、南宮眞君子、能容包衆、特於杜康不相善、而與之絕、是爲可憾、清河之意，在諷刺罷酒、其言甚傲焉、大歎遜言正色曰、寒家素乏酒錢、罷飲後、幸不損厨釀之費多矣、清河大慙、爲之自失。

〔文恭院殿御實紀附錄五〕御壯年○家齊川のころより酒を御嗜ありて、常々めし上られ、花紅葉の折にふれては、御過酒もおはしまし、左様の時も常に替らせらる、御容子は、曾てあらせられざ